私の履歴書

前橋汀子 ⑩

寮生活

辞書片手にロシア語奮闘

「ソ連流」に戸惑い、涙で目赤く

モジャイスキー号は津軽海峡を渡り、日本海の荒波を乗り越えて3日がかりでソ連極東の港町ナホトカに到着した。私と潮田益子さんは窓のない船底の客室でひどい船酔いに苦しみ続けた。

ナホトカ駅でハバロフスク行きの汽車を待っていると、よれよれの服のおばあさんが道端の花を束にして差し出してくれた。遠くから勉強にきた2人へのプレゼントだという。あのおばあさんの目を私は忘れない。この後も私はロシア人の温かい心に何度も励まされることになる。

ハバロフスクから空路でモスクワへ行き、1泊してレニングラードへ飛んだ。横浜を出てから1週間の旅だった。

空港では小野アンナ先生が迎えてくださった。先生は1年前の1960年に帰国し、黒海沿岸のスフミに住んでいた。私は手紙でソ連留学をお知らせしておいたのだ。

空港から車に乗った。行けども行けども景色は灰色で、マッチ箱のようなアパートが並んでいる。華やかな街は一度も通らず、石造りの荘厳な建物の前で車は止まった。レニングラード音楽院の寮だ。

重いドアを押し開け、ひんやりとした建物に入る。銭湯の番台のような受付に鍵番のおばさんが座っていた。「日本からの留学生だね。3階の51番、4人部屋だよ」。おばさんがごつい鍵をくれた。

61年8月の終わり。まだ夏休み中だから寮内は閑散としている。薄暗い廊下を抜け、51番のドアを開けた。病院にあるような鉄パイプの簡易ベッドが無造作に積み重ねてある。おんぼろのアップライトピアノと小さな丸テーブル、クローゼット。それしかない。殺風景とはこのことだ。

「ああ、大変なところに来てしまった」。そう思いながら、私はピアノの陰に自分のベッドを据えた。これでプライベートな空間を確保できると思ったのだが……。

数日後、同室のライヤとイーダが夏休みから戻ってきた。2人とも当時はソ連に属していたラトビアの出身だった。「テイコといいます。よろしく」。後が続かない。習ってきたロシア語は、実践ではあまり役に立たなかった。

それでも私と潮田さんは辞書を片手に奮闘した。横浜で斎藤秀雄先生がくださった和菓子「二人静」をライヤたちに弾くのがソ連流。「テイコも自分の時間なんだから好きに練習すればいいのよ」と言われたが、まずはその感覚に慣れなければならなかった。

左から潮田さん、筆者、ワイマン先生

私は早々とホームシックにかかり、部屋の外の共用トイレで毎日のように涙を流した。頭とひざ下が丸見えになる簡素な扉しかないトイレだ。赤い目をして部屋に戻るとライヤが言った。「そんなに泣くと、テイコの涙で湖ができるよ」。言い方はぶっきらぼうだが、ライヤはとても優しかった。

翌朝、ピアノの爆音で目が覚めた。イーダだ。部屋では何時から何時は誰の練習時間とスケジュールができていた。日本の感覚では人が寝ていたら遠慮するものだが、自分の番になったらお構いなしに弾くのがソ連流。「テイコも自分の時間なんだから好きに練習すればいいのよ」と言われたが、まずはその感覚に慣れなければならなかった。

私は早々とホームシックにかかり、部屋の外の共用トイレで毎日のように涙を流した。頭とひざ下が丸見えになる簡素な扉しかないトイレだ。赤い目をして部屋に戻るとライヤが言った。「そんなに泣くと、テイコの涙で湖ができるよ」。言い方はぶっきらぼうだが、ライヤはとても優しかった。

（バイオリニスト）

掲載日 2018年10月11日 日本経済新聞 朝刊 40ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。